

卒業論文の研究参加者に関する記述様式と傾向

— 教員養成を主とする単一コースの卒業論文要旨に着目して —

○野中陽一朗¹・喜多真明²

(¹高知大学教育学部・²馬路村立魚梁瀬小学校)

問題と目的

大学教育における卒業論文は、学びの集大成的な位置づけをなす。上田(2014)は、「卒業論文が書けない」主訴をもつクライアントの事例を踏まえ、卒業論文による発達促進的機能に資する3つの課題性に基づく3階層モデルを示した。水間(2006)は、卒業時に専門科目の中でも卒業論文を頑張ったことに言及する者が多く、事例的だが卒業論文のインタビュー対象者を探すことに苦痛を感じた者がいることを実証している。人を対象とする研究では、研究倫理の基本原則に伴い丁寧な進め方が必須となり、負担面も過大となる。卒業論文も内包する研究では、目的に対応した研究方法が求められる。近年、クラウドベースの研究参加者登録システムやオンライン調査会社の登録モニタの活用も増加した。こうした中、教員養成を主とする学部教育では、教員免許状取得のための履修科目の増加、専任教員の減少や心理学を体系的に学べるカリキュラムに課題を抱えている。しかし、卒業論文作成において、データ収集のための場や研究参加者の獲得過程は発達促進的機能を有する可能性も考えられ、実態把握が必要となる。

そこで、本研究の目的は、教員養成を主とする単一コース内で心理系教員のもと作成された卒業論文要旨に焦点を置き、研究参加者に関する記述様式と傾向の実態報告を行うことである。

方法

調査対象 中国四国地方に所在地を置く国立大学法人教員養成を主とする学部を構成する単一コース内で心理系教員のもと作成された卒業論文要旨での研究参加者¹⁾に関する記述内容。対象年度は、卒業論文要旨の電子データが存在する2011年度から2022年度までの12年間とした。

手続き 12年間の卒業論文要旨309編の中から、心理系教員のもと作成された卒業論文要旨138編

(44.66%)が選定された。138編に対し、評定者2名が独立に研究参加者に関する記述内容を抜き出し照合した。記述内容が異なる部分は、該当要旨を2名で確認し対応した。記述様式は、所属先が特定出来る記載内容、傾向は属性を整理²⁾した。

結果と考察

138編のうち、メタ分析2編、機械学習プログラム開発1編、文献研究1編の総計4編は、研究参加者に関する記述が無かった。134編(97.10%)は、研究参加者に関する記述があり、何らかのプロセスを介して人に関するデータ収集を実施していた。研究参加者の記述様式として、14件が研究参加者の所属先が特定出来る記載内容(幼児2件、大学生11件、社会人1件)であった。所属先が特定できたことにより、個人が特定されるわけではないが、データの一般化に必要な情報に何が必要であるか精査する必要があると考えられる。

一方、研究参加者の傾向として、属性別の件数が整理された(Table 1)。その結果、大学生が最も多いが、所属先のキャリアに即した職業従事者の属性もみられた。目的に対応した研究参加者であることを示す記述には、母集団に関する具体的な説明や結果の解釈に関係する特性をより精緻に記載する必要がある。今後は、研究参加者からの合意を得るまでのプロセスについて、卒業論文作成者の発達面も踏まえ質的な検討も必要となる。

付記

本研究は、JSPS 科研費(課題番号: 23K02686)の助成を受け実施した1部である。

¹⁾ 研究参加者表記以外にも協力者、対象等の様々な文言があるが本稿では同一として取り扱った。

²⁾ 1編の中に予備調査や複数の研究がある場合は独立して整理した。また、単一の研究の中でも目的に応じて複数の属性から研究参加者を獲得している場合も独立して整理した。

Table 1

研究参加者の属性別の件数

幼児	小学生	中学生	高校生	専門 学校生	大学生	保育者	小学校 教員	中学校 教員	高校 教員	教員 (校種不明)	社会人
12	21	6	2	4	91	6	12	2	1	1	9